

『第 20 代人吉城主 相良長每公と

その妻がキリシタンだった可能性を探る』

外山胃腸病院 岐部明廣

ただ今ご紹介に預かりました、岐部です。だいぶ前に、人吉温泉女将の会さくら会（富田千鶴子会長）の皆様から講演を頼まれました。それから人吉地区法人会女性部会の、ここの鮎の里の女将さん（有村政代部会長）と事務局の人が最近来られて、お引き受けをした次第です。実は、この本『戦国の女』の出版には、私の先祖であるペドロカスイ岐部のことを調べているうちに、本日の演題である相良長每の妻のことに辿りついたのがそもそものきっかけでした。お手元の家系図にありますとおり、秋月種実と田原松の間に生まれた龍子様は、長每公の妻と書かれている本がありますが、それは間違いでして、実際資料に書いているように、長女の龍子は、城井朝房（きいともふさ）と結婚してそのあと、入江親茂（いりえちかしげ）と再婚している。第 20 代人吉城主長每公の奥様になられたのは、六女の方なのですが名前が残っていません。十歳ぐらい姉の龍子より年下です。宮崎の高鍋や筑前秋月の資料でもそうなっているし、龍子さんがお嫁にいったところである豊前城井の資料、また豊前の添田町の資料でもそうです。

この当時、女性の名前は残っていないのです。しかし、細川藩の女性の人の

名前は全部残っています。側室や兄弟姉妹の名前まで全部残っています。ひとつには、細川家は教養のある家系だから残ったのでしょうか。元総理大臣の細川護熙さんの家系です。加賀金沢の前田利家なんかも正室、側室の名前が全部残っています。しかし、昔は、女性の名前は、残っていないのが多い。例えば、紫式部なんかもそうです。これは父親の名前です。式部というのは、身分みたいなもので、今の文部科学省の役人みたいなものです。実際の名前ではないですね…。家系図を見て解るとおり、（長每公の妻は）秋月種実公がお父さんです。母親は田原松ですが、田原松は、僕と同じ国東半島の豪族、田原親広の娘です。その両親の元に生まれた六女が長每公と結婚された…。お手元の資料のもう一つの家系図には、相良清兵衛と長每との関係、長每のご家族と相良清兵衛のご家族との関係を書いています。これは、後でご説明します。

今日、僕が特にお話をしたいのは、資料の中にある「相良長每公とその妻がキリシタンだった可能性を探る」とうことです。僕も最初からキリシタンだとは思ってはいませんでした。調べていくうちに、キリシタンで間違いないんじゃないかと思ったのです。

私が書いた本『戦国の女』の最初のページに「私と夫相良長每様はキリシタンだった。しかし、キリシタンたる証拠は、何もの残さなかった」と書いています。あの当時は、キリシタンとわかれば、お家断絶なのです。とくに慶長十九年（1614年）以降は、厳しかったのです。年号が沢山あってすみませんが、

この主人公が生まれたのが、天正九年（1581年）。本能寺の変天正十年（1582年）の前年です。この主人公が亡くなったのが、寛永十一年（1634年）です。関ヶ原の戦い慶長五年（1600年）の前後30年位と考えたいです。この間のお話です。最初に豊臣秀吉によってキリシタン禁教令が布かれたのが、天正十五年（1587年）。

秀吉が九州を征伐した時に秋月藩（今の福岡県南部）に滞在し、大阪への帰路、箱崎宮に泊った時にキリシタン禁教令を布きました。資料に書いているアルメイダ神父、末次善入（すえつぐぜんにゅう）、丸目蔵人、天草鎮尚、高山右近、古田織部、古田重治、黒田長政、黒田孝高（くろだよしたか）、セスペデス神父、豊永長式、（とよながながのり）相良清兵衛、キリシタン灯籠、村上左近、朽網宗策（くさみそうさく）。これらの人々と相良長毎の妻および相良長毎との関係を吟味しながら、更に当時のキリシタン遺物を吟味しながら、二人がキリシタンであったことを証明していきたいと思います。

アルメイダ神父というのは、弘治元年（1555年）大分（府内）に来た人です。大分県の人には良く知っています。大分市医師会病院というのがあります。その病院が別名アルメイダ病院です。この人の名前を取ったのです。僕は大分の上野丘高校というところを卒業したのですが、その高校の下にこの方が建てた育児院と病院の跡地があります。あの頃、赤ちゃんは間引きとって、殺されていたのです。また、病院もなくて大病の人々はのたれ死になっていた

のを、大分市に病院を建てて病人を、育児院を建てて赤ちゃんを救った事業をした方なのです。日本ではじめて外科手術をしたのも、この人です。また、福岡で腹に入った鉄砲の弾を取り出して14日間で治したという手紙が残っています。宣教師としてよりも医者としての名前が有名になり過ぎて困ったということがあります。このアルメイダ神父と長毎の妻との関係はというと、（アルメイダ神父が）秋月に寄っているのです。秋月に元龜二年（1572年）と天正十年（1582年）に訪れて、布教をしています。イエズス会の資料に残っています。日本の資料には、キリシタンに関しては、あまり資料は残っていないのです。ばれてはいけなくて、焼き捨てたからです。残っているのは、宣教師が書いたお手紙が、イエズス会、ローマのバチカンに残っているのです。ペドロカスイ岐部（岐部明廣のご先祖）という人が国東出身と解ったのもバチカンにその人の書いた手紙が残っていたからです。長毎公が証拠を残さなかったのは、彼が頭がいい証拠です。残って、ばれていたら人吉藩はお取り潰しになっていたでしょう。簡単に証拠は残さないのです。（中略）また、（秋月）から大分の行き帰りの途中で大友宗麟が「アルメイダ神父は自分の親しい人だから、よろしく頼む」という手紙を（秋月種実）に書いていて、この手紙もバチカンに残っています。そのため、秋月で歓待されて、その結果、秋月にキリスト教のともしびが灯って、かなりの人が洗礼を受けることになりました。教会も建っています。（中略）秋月の殿様もキリシタンという証拠が見つかった

たらずいので、証拠は残さなかった…。

次の末次善入（洗礼名：ジャコベ）この人は洗礼名があるから、完全にキリシタンと解ります。教会を秋月に建てています。この人は、秋月で一番のお金持ちの商人です。教会へ多額のお金を寄付しています。博多の有名な商人に島井宗室と神屋宗湛がいますけれども、それと同じくらいのお金持ちです。相良長每公の妻とそこご兄弟もこの末次善入の影響をかなり受けていると思われます。但し、明確な証拠はありませんが…。

次の丸目蔵人についてです。この人がキリシタンだったという証拠はありません、イエズス会に手紙が残っています。パウロ丸目とって、洗礼名がパウロです。（中略）先日、丸目蔵人の親戚という人がうちの外山胃腸病院に来て本『戦国の女』を1冊買っていかれました。（笑い）どういう親戚かは知りませんが、丸目という人だったようです。その丸目蔵人と非常に仲がよかったのが、相良清兵衛です。相良清兵衛という人は、この時代の人吉のキーパーソンだと思っています。皆さんご存知の人吉城歴史館の地下室、井戸とか洗礼池とか色々言われていますけど、洗礼池が、今後、重要な観光スポットになると思います。

次の天草鎮尚は、天草5人衆とって有名な豪族が天草に5人いるのですけれども、そのうちの一人で、この人もミゲルと云って洗礼を受けて、キリシタンです。この人の娘さんが丸目蔵人の奥様です。2人の結婚の仲人をアルメイ

ダ神父がしています。アルメイダ神父と末次善入は友達です。そういうわけで非常に関係があります。（中略）

今日のセミナーで特に取り上げたいのが、次の豊永長式（ながのり）です。この資料にある写真ですが、これは故豊永左近先生（人吉市内の豊永耳鼻科の院長）の家にあるキリシタン鞍というものです。日本語では、「南蛮人金蒔絵鞍」と書いてありますね。これは、非常に貴重なもので、京都大学にもうひとつあるらしいのですけれども日本には殆ど残っていないと云われています。大友宗麟もこれを持っていたのです。

何故、それを長式（ながのり）が持っていたのかは、解らないのですが、推測の域を出ないのですが…。その横に、刀の鐔（ツバ）があります。これも豊永先生のところのものです。豊永長式は、朝鮮の役で死んでいるのですが、家臣が持って帰っています。それが豊永耳鼻科に残っています。この鐔に十字があるでしょう。キリシタンであった一つの証拠です。これらは、非常に貴重なものなので、人吉市のために人吉城歴史館に、持って来ていただきたいくらいのもので、できなければ、レプリカを作成して、人吉城歴史館に飾ると良いと思います。豊永長式というのは、長毎の従兄弟にあたります。長毎公のお母さんが豊永長英の娘さんです。豊永左近先生の家系は長毎に結びついているのです。おばあちゃん（故豊永左近先生のお母様）がお亡くなりになられた時、お葬式に行きましたが、キリスト教のお葬式だったのです。（中略）

それからもうひとつ、長毎のお父さん（相良義陽公）に書いたイエズス会のヴァリニャーノという宣教師（巡察師）のお手紙は、非常に貴重なものです。それも人吉城歴史館に飾れたら非常に良いと思います。それが無理であれば、レプリカでも良いので、こういうのがあることを、観光客に知らしめると、（長毎公とその妻がキリシタンだったことの）信憑性が上がると思います。

次は相良清兵衛です。皆様もご存知のように人吉城歴史館に相良清兵衛の地下室が、その向こうに息子の内蔵助頼安の地下室がります。私の囲碁仲間の原田正史先生（人吉市文化財保護委員）は、昔からこれは、キリシタンの洗礼池だとおっしゃっています。僕は専門家ではないですが、そうじゃないかなと思います。原田正史先生は、地下室の石垣にはマリア像が描かれていると言われます。僕にはそれは見えないのですが、先生にはクッキリ見えると、おっしゃっています。（笑い）「見えるでしょ」と僕に聞くのですよ…。だけど何回行っても僕には、見えない…。先生の前では、うんうんと頷いていますが…。（笑い）とにかくマリア様は僕には見えないけれどもあんところに井戸を作る必要はないと思います。どう考えてみてもおかしいですよ。家系図を見て下さい。清兵衛の息子の相良内蔵助頼安の横に島津家久の娘ってあるでしょう。慶長十三年（1608）7月4日、その人が相良内蔵助頼安の奥さんになっているのです。島津は、物凄く大きな大名ですよ。そのあと慶長十七年（1612）3月9日に義理の兄、島津忠恒が人吉に来ているのです。彼は相良清兵衛の屋

敷に泊まっています。その時、地下室は見せていません。持仏堂の下にあの地下室があつて、普通の人には解らないようになっています。井戸を隠す必要はないですよ。あれは、洗礼池だと思います。反論する人があるかもしれませんが、一説によると、という前書きを書いても洗礼池であるということをお大きく宣伝する必要はあると思います。（中略）

次がキリシタン灯籠です。お配りした資料にキリシタン灯籠の写真が二つありますけれど、良く見ると八頭身の神父様が下の方に彫られています。これらは、竿石がラテン十字です。僕が不思議に思うのは「人吉市史」の中にキリシタンのことが一字も書かれていません。一説にはキリシタンであるとか、可能性があるくらいは書いてほしかったです。人吉の人は、昔から非常にこのことに関して、喋りたくなかったのではないかと想像します。キリスト教信者とバレたら、お家断絶ですよ。これが、先祖代々身にしみて、信仰があっても、中々表に出せなかった。

このキリシタン灯籠ですが、古田織部が考案したといわれています。それで「織部灯籠」とも言われます。彼は千利休七哲の1人です。高山右近も細川忠興もそうです。キリシタン灯籠は、お茶と関係があります。何故これを使ったかという言い訳が立つからです。これは、「お茶の時に使っていました」と。実際はそうではない。私の書いた資料を見て下さい。古田織部の下に古田重治という人がいるでしょう。この人は古田織部から数えて5代目なのですが、

大分の竹田城（滝廉太郎の荒城の月）の家老だった人なのですけれども、キリスト教の洗礼を受け、ヨハネという洗礼名があり、江戸時代の1600年代のかなり後半まで宣教師をかくまった人です。この人の屋敷にこれ（キリシタン灯籠）が今でも残っています。教会がないから信仰の《証》としてキリスト教を信じた人々には、キリシタン灯籠が必要だったのです。

もう1人は、末次善入、この人も洗礼を受けた人です。洗礼名はジャコベ。屋敷が福岡県の秋月に残っていて、この屋敷に（キリシタン灯籠）があります。それともう1人が黒田孝高（よしとか・官兵衛・如水）です。洗礼名はシメオン。キリシタンです。朝鮮の役で長毎公に宗教的感化をした人物と言われています。福岡の崇福寺に彼のお墓があるのですが、その墓にキリシタン灯籠があります。それは、伝承では《アーメン石》と云われています。

民俗学を研究する上においても伝承や云い伝えは大事です。あの柳田国男も伝説や伝承を大切にしていました。人吉球磨にもたくさんの云い伝えがあると思います。それを皆で残すようにすると良いと思います。相良三十三観音巡りに行って、発見したことがあるのですけれども、あさぎり町深田の内山観音に《千手の局》という伝説が残っています。千手の局が子供の時に人さらいに遭い、鹿兒島に連れ去られたのです。千手の局は美人で頭も良く人吉球磨の人です。薩摩に連れ去れた後、薩摩の殿様の島津貴久が「一日に和歌百首を詠んだら、側室に迎えよう」と領民に募られ、この千手の局だけが和歌を詠むこと

ができた。あの頃、和歌を詠むことができれば、教養のある知識人として認められた。そしてその女が島津貴久の側室となりました。それから生まれた子供が「島津家久」です。

島津家久の娘さんが、相良清兵衛の息子（内蔵助頼安）と結婚したのです。つまり、相良清兵衛の長男の奥さんのお祖母ちゃんは、人吉球磨の人になるわけです。驚くべき人のつながりですよ。楽しいですね。人吉城歴史館の洗礼池のところに、そのことを大きく書いて宣伝しても良いと私は思うのです。鹿兒島の人には誰でも島津家久や貴久のことは知っていますよ。その人（貴久）の息子が義久、義弘、歳久そして家久なのです。その家久を生んだのが、人吉球磨の女の人（千手の局）です。伝承ですけれどもね。だけどそういう伝説というのは、どこかに根拠があるはずですよ。そういう伝説を大事にしてあそこ（洗礼池）に書くと良いと思います。

キリシタン灯籠は、人吉の御薬園にもあります。今は、山田先生の所有ですが、相良家の別邸でした。御薬園は昔は御楽園といいました。それは、相良さんが、誰にも見つからないように信仰するのに、家族でお祈りするのに都合の良い場所です。《御楽園》名前は《天国》みたいでしょう…。キリスト教信仰の香がします。江戸時代の末期に御楽園から御薬園に名称が代わっています。

（中略）キリシタン灯籠は、願成寺にもあります。それからカトリック教会にもあります。これは、田代敏彦さんのもので田代敏彦さんの先祖が長毎公の家

臣の田代正勝です。それがカトリック教会へ移されたのです。宮田さん、加藤さんのところにもあります。それら五つが長每公の時代のキリシタン灯籠です。このキリシタン灯籠というのは、九州でも数少ない貴重なものです。人吉が圧倒的に多いのです。10個もあるのは人吉だけですからね！キリシタン灯籠の宣伝をしたらいいと思います。特に長每公の時代のキリシタン灯籠がキリシタンの証拠として重要です。御薬園のキリシタン灯籠は、寛永八年（1631年）造だと解っています。長每公が信仰の証でこれを建てているのです。

次が村上左近です。人吉歴史資料の南藤曼綿録では、村上左近（人吉藩家老）一家はキリシタンだったとあります。人吉城跡に大きな《左近の石》というのがあります。実際、左近はこの家系図の、長每公の長女のお鶴のいいなづけです。長女のお鶴もキリシタンだったと思われる。この当時、宗教の違う人物をいいなづけにはしないでしょう。だから左近の石の前にも説明書きを入れると良いです。「一説には、南藤曼綿録によれば村上左近はキリシタンだった云々。」彼の一族は、みんな殺されています。また、彼は、はむかうこともなく切られるのです。これは、キリシタンの殺され方です。細川ガラシャ夫人もそうですよね…。キリスト教は自殺が許されていないからですね。切腹はしない。誰かにやられるしかないのです。どう考えてみても村上左近はキリシタンです。村上左近のお母さんは豊後の朽綱宗策（くたみそうさく）の娘です。朽綱宗策は熱烈なキリシタンです。大分の朽綱はキリシタンの町でその豪族の

娘で間違いなくキリシタンです。村上左近はその（朽綱宗策）の娘の息子です。寛永一八年（1641年）に人吉藩の家老になって寛永十九年（1642年）に殺されます。『左近の石』も人吉愛の聖地巡礼ルートのひとつにしたらいいと思います。立て札には「一説には、南藤曼綿録によれば村上左近はキリシタンだった、お母さんは豊後の朽綱宗策の娘である。」と書いて…。朽綱宗策は大分県人なら誰でも知っていますよ。大分の長湯温泉の出身です。長湯温泉には大きな教会の跡があります。皆様も長湯温泉に行った時には、是非ともご覧になって下さい。あのころは幼児洗礼というのが多いのです。幼児洗礼を受けたペトロカスイも両親がキリシタンでした。（中略）

最後ですけれどもマリア観音についてです。これは国東にもあります。当時、キリシタンが最初お寺さんをお参りして、帰りがけにお寺さんにあるマリア様にお参りする。理解のある国東のお寺さんでは、これを認めてくれていたと言ひ伝えられています。人吉に所縁のあるマリア観音が八代市の金立院にあります。今は、子安観音になっています。一説にはこのマリア観音を長每公の奥様が持っていて金立院に預けたと言われています。証拠がないけれども、証拠がないというのは、相良さんが生き残った理由のひとつです。証拠があったら徳川家光以降は凄い弾圧ですからね。お家断絶ですからね。八代の金立院にあるマリア観音のレプリカを作って相良清兵衛の屋敷跡に飾るのもいいと思いま

す。若い観光客を引き付けると思います。「子安観音、一節には長每公の妻が長年たずさえていたマリア観音と言われている」と書いて…。

この本『戦国の女』の表紙のこの赤いの何か解りますか？これは、国東半島の赤い夕陽なのです。僕が子供の頃から見た夕陽です。僕がこの本の中で夕陽のことを何度もか書いています。文芸社の人が写真を撮りにいったのです。周防灘に沈む夕陽です。不思議と国東半島の北面の夕陽は大きいのですよ…。結構あの夕陽を観に来る人は多いのです。実際あのあたりの会話（夕陽のことを言う会話）は全部フィクションですが…。

それから最後にもうひとつだけ、相良長每公が嫡男の頼尚へ遺言を直接言っています。領民が「すりきりにならないように愛を以て手を差しのべる」事とあります。相良家文書では、少し文言が異なりますが…。すりきりとは貧困とか貧乏という意味です。貧乏にならないように、領民に愛を以て手を差しのべる。愛というのは仏教用語では悪い意味に使われます。愛は欲望（カーマ）なのです。満たされることのない欲望（トリシュナー）を渴愛といいます。キリスト教は、愛を正しい言葉として認めています。あの言葉（遺言）を知って、長每公はキリシタンだったと、私は思うのです。あの時代に仏教では「愛」の一文字は出てこない。仏教では慈愛ですね。

その遺言が本当に長每公が言ったとすれば、《愛を以て手を差しのべる》これで、長每公がキリシタンだったと、私は確信しました。丁度、時間となりましたので、これを以て私の講演を終わりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）